

令和元年6月13日現在

機関番号：13801

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02663

研究課題名（和文）ハイダ語の形態統語法と構造的変化に関する総合的研究

研究課題名（英文）A comprehensive study of the morphosyntax and structural changes of the Haida language

研究代表者

堀 博文 (Hori, Hirofumi)

静岡大学・人文社会科学部・教授

研究者番号：10283326

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究課題は、カナダのブリティッシュ・コロンビア州北西部のハイダ・グワイ（クーン・シャーロット諸島）で話されるハイダ語の文法記述とおよそ100年の間に生じた言語変化を探ることを主たる目的とするものである。

文法記述の面では、動詞形態法に關係する接辞の機能を明らかにするとともに、連体修飾構造を詳細に記述することを試みた。また、過去に蒐集されたハイダ語資料の整備を図るとともに、それらに反映されるハイダ語と現代の話者のそれを比較し、とりわけ動詞形態法における著しい変化を記述した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究課題の成果の意義は、ハイダ語のいくつかの文法事象に関して、先行研究では十分に扱われていなかった問題を明らかにし得た点、あるいは、それらとは違った視点から分析した点にある。例えば、類別接頭辞が名詞の指示対象を個別化する働きを有し、それが類別一般の本質的な機能であること、また、状態化接尾辞の機能が「事態の状態化」と「事物の状態化」を表わす動詞を派生すると統一的に説明したこと、更に、連体修飾構造の記述に際して疑似的名詞節なる単位を導入した点などが成果の大きな特徴であるといえる。

加えて、こうした基礎的な記述の積み重ねは、消滅する可能性の高いこの言語を保存するためにも大きな意義をもつと思われる。

研究成果の概要（英文）： This project aims to describe grammatical aspects of the Haida language, a language isolate spoken off the northwest coast of Canada. The main topics concern the domain of the morphosyntax; classifiers and a stativizer suffix in the verbal morphology and noun-modifying constructions are described in-depth to elucidate the relevant phenomena that have not been fully understood in previous studies.

It also investigates changes that the language has undergone for over 100 years by making use of texts collected by John R. Swanton in the beginning of the 20th century and recordings made in 1960s and 70s by Alaska Native Language Center, the University of Alaska. It is made clear that its changes are especially remarkable in the verbal morphology where the evidential suffix and the informational suffix are almost lost in present-day speakers.

研究分野：言語学

キーワード：形態論 統語論 名詞修飾構造 類別辞 状態動詞 活格型言語

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究課題が対象とするハイダ語 Haida は、北米先住民諸言語の一つで、アメリカ合衆国アラスカ州やカナダのブリティッシュ・コロンビア州などで話される系統不明の孤立言語である。ハイダ語はいくつかの地域方言に分けられるが、そのいずれにおいても、流暢な話者が少数の高齢者(およそ 80 代)に限られ、ハイダ語全体でも数十名程度しかいない、いわゆる消滅の危機に瀕している言語の一つである。しかし、ハイダ語の記述研究は、1900 年代初頭に行なわれたいくつかのものを除けば、その後、ほぼ 70 年以上にわたって等閑に付されており、1970 年代以降に入ってようやくその研究が再開され、文法記述(Enrico, John. 2003. *Haida syntax*. The University of Nebraska Press)や辞書(Enrico, John. 2005. *Haida dictionary*. Alaska Native Language Center)などが現われるようになった。

研究代表者は、1990 年代からハイダ語の中でも、南部方言群に属するスキドゲイト方言(カナダのブリティッシュ・コロンビア州のハイダ・グワーイ [旧名: クィーン・シャーロット諸島])を対象に、その文法体系を解明すべく現地調査を重ねてきた。当初は、その音韻面、とりわけ声調と音節構造の関係の解明を図る調査を重点的に行ない、その後、徐々に調査の焦点を形態統語論に移し、ハイダ語においてとりわけ特徴的ともいえる動詞複合体に関与する接辞の機能と用法、更に言語類型論的に注目されることが多い分裂自動詞性にかかる意味特徴を明らかにすることに努めてきた。

研究代表者の研究により、これまで十分理解されていなかったハイダ語の様々な事象が明らかにされたといえるが、その一方で、ほぼ手つかずのままの問題も多く残されており、とりわけ統語面に関する研究が不十分であった。こうした状況の中で、それらの問題の解明を図るために本研究課題が立案された。

2. 研究の目的

本研究課題は、上述したような背景をもとに、ハイダ語文法の包括的な理解に向け、これまで研究代表者が行ってきた研究の一層の深化と発展を目指したものである。その目的は、大体、次のようにまとめられる。

- (1) ハイダ語は、とりわけ動詞の形態法に関わる接辞が多く、時として複雑な構造を有する動詞複合体を形成することがある。研究代表者は、これまでそれらの接辞の記述に努めてきたが、それでもなお、まだ理解が不十分なものもいくつかある。まずは、そうした接辞の機能を明らかにすることを一つの目的とする。
- (2) 統語面に関しては、いわゆる連体修飾構造の全体的な記述を図る。先行研究によれば、ハイダ語の連体修飾構造は、被修飾部が修飾部(主要部)から切り離されない、いわゆる「主要部内在型関係節」を基本の型とするとみられるが、それ以外の型の連体修飾構造があるのか、また、連体修飾構造における時制が主節のそれとの関係でどのように標示されるのか、主要部となる名詞句がもとの文においてどのような文法機能をもつものまで許されるのかなど、そういった点も明らかにする。
- (3) 上述の通り、ハイダ語は、その話者がごく少数の高齢者に限られた消滅の危機に瀕する言語であり、その使用場面と頻度が縮小する一方、日常的には英語が多く用いられているのが現状である。いわば英語にとって替われようとしている状況の中において、ハイダ語が英語の影響を受けたり、あるいは、その使用が縮小することにより、ハイダ語に何らかの変化が認められることが予想される。そこで現代の話者が話すハイダ語と、およそ 100 年前の文献資料に残されたハイダ語などを比較することにより、どのような変化が認められるかを明らかにする。
- (4) 上に述べたこれらの問題を解明するための基礎資料の整備も併せて行なう。
- (5) 本研究課題で得た成果を現地で行なわれているハイダ語教育に資するよう、現地の関係者と協議を重ね、還元する方途を探る。

3. 研究の方法

本研究課題を遂行するにあたって最も重要なのは、ハイダ語の一次資料を得ることである。そのために、各年度 3 週間から 1 ヶ月弱の間、ハイダ語が話される地域に滞在し、話者の協力を得ながら、ハイダ語の資料の蒐集を図った。

更に、過去のハイダ語資料の蒐集と整備を行なった。ハイダ語の古い資料には、1900 年代初頭に、人類学者スワントン John R. Swanton が残したテキストがある(*Haida texts and myths: Skidegate dialect* [Bureau of American Ethnology, Bulletin 29, 1905] とアメリカ哲学会(ペンシルベニア州フィラデルフィア)に所蔵されている未公開の資料)。これらは、1840 年代辺りに生まれた話者のハイダ語を記録したものであり、現代の話者にはみられない多くの言語特徴が残されているなど、その資料的価値は極めて高い。しかし、残念ながら、音声表記や文法分析において多くの誤謬がみられるため、それらを正しながら、整備を行なう必要があった。

加えて、アラスカ大学アラスカ原住民言語センターに所蔵されている、1960 年代から 70 年代にかけて録音された音声資料がある(同センターのサイトで公開されている)。その中には、スワントンが記録したハイダ語の話者よりも一世代下の 1870 年代辺りの話者によるハイダ語の音声資料が含まれている。しかし、これらは、文字化された資料はおろか、英訳も残されていないために、まずは、現代の話者の協力を得ながら、その文字化と分析を行なった。

これらのスワントンの資料，更に，アラスカ原住民言語センターの音声資料，また，現代の話者の資料を加えることにより，それらおよそ3世代から4世代にわたるハイダ語の変化を探ることができる。

こうした過去の言語資料は，今では現地調査では聞き出し得ないような情報が含まれており，極めて貴重である。それがまたハイダ語の文法の全体的な理解を得る上で資するところが大きいのは言うまでもない。

4. 研究成果

本研究課題における成果は，おおよそ次の点にまとめられる。

- (1) ハイダ語の動詞形態法に関わる接辞，とりわけ， 類別接頭辞と 状態化接尾辞を詳細に記述した。

類別接頭辞 classifier の機能の記述

類別接頭辞は，動詞に付加される要素の一つで，その典型的な用法は，他動詞節であればその目的語，自動詞節であればその主語となる名詞句がどのような意味範疇に属するかを示すというものである。名詞類別の一つで，いわば動詞の側から統語的に関連するそれらの名詞句の意味範疇を示す。

個々の名詞は，多くの場合，結びつく類別接頭辞が決まっている（例えば，「ドア」であれば硬くて平たいもの，「椅子」であれば構造体の範疇にそれぞれ属することを示す類別接頭辞が用いられるなど）。それは，いわばその名詞に本来的に備わっている性質（形や材質，機能など）に基づく分類であるといえる。

しかし，名詞と類別接頭辞の関係は，必ずしも一対一とは限らず，一つの名詞に対して，話者が最も顕著であると見做す特徴に応じて，異なった類別接頭辞が使い分けられることがある。例えば，「石」に対して，球体であることを示す類別接頭辞か平たい物体を表わす類別接頭辞が用いられるかによって，その「石」の形状が詳しく定められる。すなわち，「丸い」や「平たい」といった修飾語を名詞に加えるのではなく，動詞の側からその名詞の特徴を指定するわけである。ハイダ語の類別接頭辞には，こうした名詞の指示対象をより個別的に表わす機能があるといえる。

更に，ハイダ語の類別接頭辞の特徴として，擬音・擬態表現を表わすという働きがある（ハイダ語には，擬音語や擬態語の類いは存在しないとみられる）。これは，形や大きさなどを表わす類別接頭辞の拡張的用法であるとみられ，個々の類別接頭辞が単なる類別の機能に留まらず，より具体的な意味を表わすことを示すものと考えられる。

状態化接尾辞 stativizer の機能の記述

ハイダ語には，「NP1 が NP2 を壊す」のような2項動詞に付加されて「NP2 が壊れる」のように，もとの文の主語（NP1）が削除され，目的語（NP2）を主語とする構文を派生する接尾辞がある。一見したところ，いわゆる受動構文に相当するが，派生した構文においてもとの主語（すなわち動作者）を表わすことができない点において，受動構文とは異なる。この接尾辞は，全ての2項動詞に付加されるわけではなく，その対象に何らかの変化を加えることを含意する動詞に限られることから，その接尾辞が付加されて派生した動詞は，その行為の結果の状態を表わす。また，この動詞は，2項動詞のみならず，状態変化を表わす1項動詞に付加され，結果の状態を表わす。その際，派生した動詞がとることのできる名詞項の数は1つのままであることから，少なくとも1項動詞にこの接尾辞が付加されても，統語的には何ら違いをもたらさないといえる。以上から，この接尾辞の本質的な機能は，「出来事（コト）の状態化」という意味を派生すると考えることができる。

一方，ハイダ語には，この接尾辞と同じ形式で，名詞に付加されて，動詞を派生する接尾辞がある（例えば，「弟」「弟である」，「毛」「毛が多い」，「夜」「暗い」など。尚，ハイダ語には「形容詞」という語類はない）。こうした点から，この接尾辞の機能は，「事物（モノ）の状態化」という意味を派生すると考えられる。

先行研究では，これら2つの接尾辞を別のものと見做しているが，いずれも1項動詞を派生する点，更に，その主語が派生動詞で表わされる事柄の生起に何ら関わっていないという点が共通しているゆえに，一つの接尾辞として捉えるべきであるとするのが妥当である。

ハイダ語には，名詞に付加されて動詞を派生する接尾辞としてもう一種類ある。例えば，「夜」という名詞から「一晩過ごす」という動詞，同様に，「息」から「呼吸する」，「話」から「話す」などのように，いずれもその主語がその行為の引き起こし手となるような動詞を派生する。また，これと同じ形式の接尾辞は，動詞に付加され，その動詞のとり得る名詞項を1つ増やすという働きをする（例：「暖かい」「暖める」，「沸く」「沸かす」，「落ちる」「落とす」など）。これらは上に述べた接尾辞とはちょうど対極の関係にあるとみられる。これらの接尾辞は，一方は動作性を表わす動詞を派生し，一方は状態性を表わす動詞を派生するという点で，動作動詞（活格動詞）と状態動詞（不活格動詞）を対立の軸とする活格型言語としてのハイダ語の性質をより強く特徴付けるものとみることができ，更に，同種のタイプの言語に通底する特徴であることを示唆するものである。

- (2) ハイダ語の連体修飾構造の記述

統語面においては，ハイダ語の連体修飾構造の全体的な記述を試みた。ハイダ語の連体修飾構造は，主要部が修飾部から切り離されることのない，いわゆる主要部内在型であるとされる。

また、加えて、主要部が修飾部から切り離された主要部外在型の連体修飾構造やいわゆる「外
の関係」、すなわち、主要部と修飾部との間に何らかの文法関係が認められないような連体修飾
構造もみられる。このように、従来の研究で指摘されるとおり、ハイダ語の連体修飾構造には
いくつかの型がみられると考えられる。

こうした従来の考え方に対し、関係節全体が名詞相当の「疑似的名詞節」をなすと考え、い
わゆる主要部内在型関係節は、その疑似的名詞節に顕在化しない名詞句が並置されたことによ
って修飾関係が生じたと見做す。同様に、主要部外在型の関係節や「外の関係」にあるものの
一部は、疑似的名詞節と外側に置かれた名詞句とが並置されたことによって修飾関係が生じた
とみる。

疑似的名詞節と名詞句が並置された時に、両者の間に修飾・被修飾の関係が認められるとい
うのは、ハイダ語の名詞句同士が並置された際にも一般的にみられることであり、ハイダ語に
おいては、修飾・被修飾の関係は、句レベルと節レベルのいずれにおいても一貫した原理で表
わされると説明できる。更に、このような疑似的名詞節を指定することは、ハイダ語の複文構
造も統一的に説明できる可能性を示唆する。すなわち、ハイダ語の名詞句には他の語との文法
関係を示す標識が付かず、例えば、名詞句と述語の関係は、語順あるいは付属語で示される。
特に名詞句と付属語からなる句は、全体的に副詞句を構成するが、その同じ付属語は複文の従
属節の標識としても用いられ、副詞節を構成する。その従属節を疑似的名詞節として捉え直せ
ば、ハイダ語の複文構造も句レベルのそれと同様に説明できる可能性をもたせると考える。

(3) ハイダ語の構造的変化

およそ 100 年の間にハイダ語が蒙った構造的変化を探るために、まず、過去のハイダ語の資
料の整備を行なった。上述の通り、スワントンが残したテキストは、音声表記や文法分析の面
で多くの誤りが認められるため、まずは、話者の協力を得ながら、それらを正し、分析し直す
必要があった。また、アラスカ大学アラスカ原住民言語センターで公開されているハイダ語の
音声資料のうち、特に神話が録音されたものは、録音の質の問題に加え、現代の話者には理解
できない部分も少なからずあり、完全に解明するには至らなかった。従って、上に述べたよう
に、3 世代から 4 世代に亘る完全に連続した通時態ではないが、それでも、いくつかの変化を
明らかにすることができた。

ハイダ語の動詞に付加される接尾辞の一つに、発話の情報源が間接的（多くの場合、伝聞）
であることを示す証拠性接尾辞がある。現代の話者では、その接尾辞が主節の動詞に現われる
ことがほとんどなく、発話で叙述される過去の出来事が直接経験か間接経験であるかが区別さ
れなくなっている。更に、その接尾辞は、関係節（上では「疑似的名詞節」としたが、便宜上、
「関係節」とする）において用いられる場合は、主節で述べられる出来事よりも前に生じた
ことを表わす。現代の話者は、やはりそのような場合においてもこの証拠性接尾辞を用いるこ
とがなく、単純に過去時制の接尾辞がその役割を担うようになっている。更に、過去のハイダ
語においては、関係節の主要部（つまり、被修飾部）が定であるか否かは、主に関係節に付く
一定の接尾辞によって表現されていたが、現代の話者のハイダ語においては、関係節ではなく、
専ら主要部となる名詞に付く限定接尾辞の有無によって示されるようになった。

この証拠性接尾辞が使われなくなったその要因を確と見定めることは難しいが、形態法の簡
素化がその背景にあることは十分考えられる。実際、この接尾辞が付加されると、かなり複雑
な形態音韻的な変容が生じるが、屈折接尾辞の付加による形態音韻的な規則さえ十分に保たれ
ていない現代の話者においては、屈折接尾辞に関わる形態音韻規則よりも一層複雑なそれを保
持しているとは考えにくい。更に、こうした情報源にかかる区別は英語ではみられないことか
ら、そうしたこともこの接尾辞の使用が縮小していった一つの要因であるとも考えられる。

更に、関係節において情報構造に深く関わるとされる接尾辞がスワントンの時代のハイダ語、
あるいは、その下の世代の話者によるハイダ語では広くみられるが、現代の話者では全く使わ
れなくなっている。やはり話者であってもその使用が意識的に捉えにくいものであるゆえに、
とりわけ日常的にハイダ語を使用することが少ない現代の話者においては、十分に理解される
ことなく廃れてしまったものと思われる。

(4) 本研究課題による成果の還元

毎年度、現地で調査を行なう際、現地のハイダ語教育の関係者と協議をし、本研究課題によ
る成果を還元する方途について話し合うとともに、更に、現地で作成されているハイダ語教材
やプロジェクトに関して、言語学の立場から助言をした。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計3件)

堀 博文,「ハイダ語の動詞接尾辞 -gaa について」,『静言論叢』第 2 号,71-91 頁,2019 年,
静岡大学言語学研究会,査読あり,DOI: 10.14945/00026418

堀 博文,「ハイダ語の連体修飾構造」,『静言論叢』第 1 号,77-120 頁,2018 年,静岡大学
言語学研究会,査読なし,DOI: 10.14945/00024967

堀 博文,「ハイダ語の類別接頭辞と名詞類別」,『人文論集』第 65 号の 2,159-185 頁,2017
年,静岡大学人文社会科学部,査読なし,DOI: 10.14945/00009979

6. 研究組織

(1)研究分担者
なし

(2)研究協力者
なし

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。